



米子市埋蔵文化財センターたより



第43号

2021年12月

日野町福長下モノ原遺跡 ふくながし ー製鉄炉の地下構造を調査ー



製鉄炉の地下構造の断面

令和3年7月から行ってきました福長下モノ原遺跡の発掘調査は、10月中旬に終了しました。

9月に実施した遺跡見学会や、センターたより第42号では製鉄炉の地下構造の上部を紹介しましたが、その後の調査で、さらにその下部の地下構造やその築造工程が明かとなりました。また、製鉄炉の周辺からは柱を据えた穴が4つ見付き、製鉄炉の上に屋根がかかっていたことも明らかとなりました。

下部の地下構造は、防湿を目的とした「本床状遺構」と呼ばれる長さ4.9m、幅1.6m、深さ75cmの長方形の掘り込みと、その両側の「小舟状遺構」と呼ばれる長さ3.5m、幅0.4m、深さ35cmの溝が見つかりました。この本床状遺構は、湿気を含みやすい黒ボク土層を掘り込んで造られていました。湿気を防ぐために黒ボク土を取り除き、その中に砂を多く含む土を入れ、さらにその上に粘土を貼り、その粘土を燃焼させて乾燥させる工程を4回繰り返しています。また、小舟状遺構の中には製鉄炉の炉壁の塊が詰め込まれていることから、今回見つかった製鉄炉よりも古い時期の製鉄炉が近辺に存在したことが推測されます。このような小舟状遺構を持つ地下構造は、出雲・伯耆地域ではほとんど見つかっておらず、備中・安芸地域で見つかっています。このことから、備中・安芸地域との関係がうかがえますが、備中・安芸地域ものとは構造的に異なる点があることから、日野郡独自で展開した形態と考えられます。(高橋)

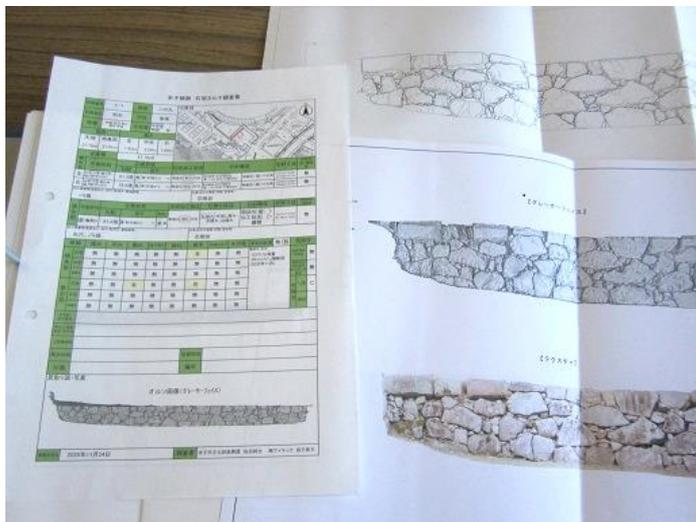
発掘調査情報

－ 米子城跡の石垣カルテの作成 －

国史跡の米子城跡の石垣は、築かれてから数百年の時を経過しています。それでも、崩れずに当時の姿を保っていますが、石の亀裂、積石の張出しなどの劣化が観察されます。放置しておく地震などで崩れる恐れがあります。建物は失われていますので、石垣が城を語る貴重な遺構です。

米子市では、令和2年度から国史跡米子城跡の整備のために石垣カルテを作成しています。石垣カルテとは、病院のカルテのように、石垣の現況を記録して石垣の保存・保護に役立っています。万が一、地震などで石垣が崩れても、カルテを基に石垣を積み直すことができます。

昨年度は二の丸枡形の石垣カルテを作成しました。実際の作業では、レーザーを用いた3次元測量やオルソ画像を作成して石垣を図化しています。石垣カルテには、石垣の変形や間詰石の欠落、矢穴の有無などの情報を石垣の面ごとに作成しています。現在は二の丸の石垣を中心に進めていますが、将来的には米子城跡全域の石垣カルテを網羅する予定です。(佐伯)



石垣カルテカード・図面

整理室たより

博労町遺跡第2次調査出土遺物の整理 — 遺物復元作業が進む —

埋蔵文化財センターでは、博労町遺跡の第2次調査の報告書作成に向けて出土品の整理を進めています。水洗、記名という基礎整理を終えて、実測と復元作業に取り組んでいます。

出土遺物の大半は古墳時代前期の甕や高坏などの土師器で、壊れずに完形で出土したものは極僅かで、ほとんどが壊れたものです。これらの土器は当時壊れたから捨てられたと考えられるもので、破片の全てが残っていません。出来るだけ接合し復元するのですが、欠落部分はクレイテックスという補修材で穴埋めして復元しています。(小原)



土器復元作業

遺跡シリーズ ハンボ塚 (はんぼづか)

ハンボ塚は、西伯郡大山町(旧名和町)名和字馬郡に所在していました。

古墳は名和川の河岸段丘扇状地に立地しています。

1976(昭和51)年の農免農道の建設に伴い名和町教育委員会によって調査されました。

墳丘の直径35m、高さ5mの円墳で周溝を含めた直径は54mを測る。墳丘は二段に築成され、葺石が敷き詰められていました。

埋葬主体部は削平されて不明でしたが箱式石棺と推定されています。



(ハンボ塚発掘調査報告書 1980 名和町教委より)

遺物は、青銅製馬鐸、金銅製装具、須恵器の高坏や瓿、土師器の高坏、甕などが検出されています。周溝内から多量の円筒埴輪が、造り出し部から人物、水鳥、馬、家、蓋などの形象埴輪が検出されています。須恵器や埴輪の出土から古墳時代中期の古墳と考えられます。

この地域の大型の円墳であることや、金銅製品等の遺物の存在から名和川水系の首長墓と考えられます。(小原)

コラム 発掘された遺物③

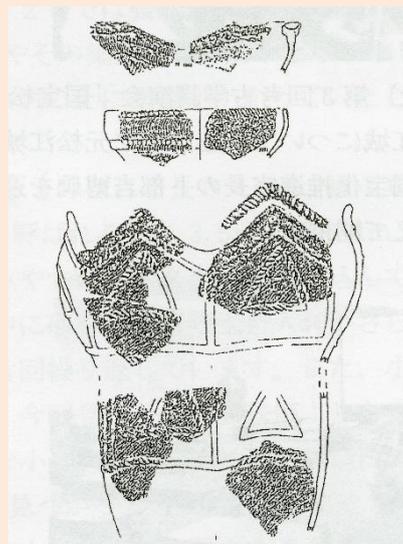
—縄文時代中期の土器—

縄文時代中期は、5千5百年前から4千年前と考えられています。

山陰の中期土器は、爪形文、円形刺突文を付ける船元式土器や縄文地文で底部が五角形の波子式土器、縄文地沈線文等をつける里木式土器、渦巻沈線文等の北白川式土器と呼ばれる土器です。器形はキャリパー形の深鉢を呈するものが多く、波状口縁を持つものも見られます。

東日本にみられる火焰土器のような派手な形態や文様の土器はなく一見地味な土器が出現しています。

米子市内では、陰田第7遺跡、目久美遺跡が代表的な遺跡です。(小原)



陰田第7遺跡の中期縄文土器図

センター・資料館日誌

10月16日（土）第2回考古学講演会「米子城跡の陶磁器」を講師に文化振興課の佐伯純也氏を迎え開催した。



11月4日（木）東京のクラブツーリズムが埋文センター見学で来館。

11月5日（金）鳥取県立博物館福代学芸員が白山経筒調査で再来館。

11月6日（土）米子市文化財団カルチャーフェスティバルへ「勾玉づくり」を出店。



11月13日（土）第3回考古学講演会「国宝松江城について」を講師に元松江城国宝化推進室長のト部吉博氏を迎えて開催した。



11月17日（金）南部地区公民館連絡協議会が研修で来館。

11月17日（金）こどもデイサービス「わこう皆生通り」へ勾玉作り教室の出前。

11月29日（月）鳥取市の久保氏が瓦塔調査で来館。

福市考古資料館企画展「発掘で解った米子城」が終了。

12月2日（木）上淀白鳳の丘展示館井上学芸員が上淀廃寺資料の返却で来館。

12月11日（土）岡山市埋蔵文化財センターの田島氏が目久美・陰田遺跡の資料調査で来館

12月17日（金）青谷上寺地遺跡整備室の濱田課長補佐が博労町遺跡出土品の指導で来館。

編集後記

2021年はコロナウイルスの拡散で、中止になった行事が多かったのですが、後半になって全国的にも感染拡大が収まりつつあり、鳥取県では感染者ゼロの日が続いております。そのため勾玉作りの出前もできましたが、新たな変異株が出てきており、来年はどうなっていくか心配です。2022年には拡散が収まって良い年になるように祈っています。

センターの調査室職員は、博労町遺跡の報告書の年度末発刊を目指して頑張っています。

発行日 令和3年12月24日

発行者 米子市埋蔵文化財センター

指定管理者（一財）米子市文化財団

電話 0859-26-0455

Eメール yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp